

「お金に愛されないエンジニア」のための新行動論(12):

「老後の2000万円」を準備できない私のための新アプローチ ～検討編

<https://eetimes.itmedia.co.jp/ee/articles/2308/21/news026.html>

数年前に世間を騒がせた「老後2000万円問題」。今回は、その問題の中身を解説し、「2000万円準備できない私」のための新たなアプローチについて検討してみます。

2023年08月21日 11時30分 更新

[江端智一, EE Times Japan]



今回のテーマは、すばり「お金」です。定年が射程に入ってきた私が、あらためて気づいたのは、「お金がない」という現実でした。2019年には「老後2000万円問題」が物議をかもし、基礎年金問題への根本的な解決も見いだせない中、もはや最後に頼れるのは「自分」しかいません。正直、「英語に愛され」なくても生きていくことはできますが、“お金に愛されない”ことは命に関わります。本シリーズでは、“英語に愛されないエンジニア”が、本気でお金と向き合い、“お金に愛されるエンジニア”を目指します。⇒[連載バックナンバー](#)

“幸せ”を舐めるな

最近、幸福(ウェルビーイング)に関する論文を片っぴから読み倒しています。

私には、リタイア後に新興宗教を立ち上げたいとか、そういう野心はありません。大学での研究を進める上で、どうしても必要であるためです。

皆さんも、「ソーシャルキャピタル」とか「ウェルビーイング」とかという用語をどこかで聞いたことがあると思います。これは、日本語では「社会関係資本」とか「身体と精神の健康な状態」などといわれているものです。そして一つ確かに言えることは、

—— これらの研究論文の数が『ものすごい』。

読者の皆さんの多くは、『幸せというものは、個人の主観によってバラバラに違うものだから、そんなことを議論してもしょうがない』と思っているかもしれませんが、それ、はっきりいって『“幸せ”を舐めています』。

「個人の主観によってバラバラに違う」を、きちんとカテゴライズし、アンケートによってデータを収集し、統計解析的手法(因子分析、SEMなど)まで用いて、データだけでは目に見えない要因抽出まで突き止めにかかっています。これらの研究員たちの執念に、私は恐怖、もとい……畏怖を感じています。

『幸せになるための、50の約束』という表題の本を、コンビニの書籍コーナーの前で目にする度に、私は心の中で叫んでいます —— 『“幸せ”を舐めるな!』と。

「老後2000万円問題」とは結局何なのか

こんにちは、江端智一です。

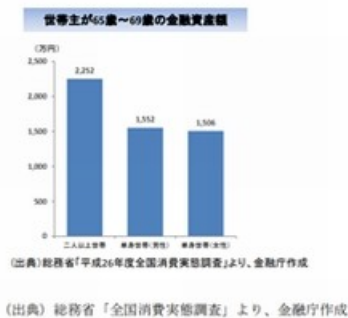
今回の前半は、この連載の大きなきっかけとなった、いわゆる「老後2000万円問題」についてのその経緯と内容の概要の説明を行います。そして後半は、「老後に2000万円を準備できない私」のための、新しいアプローチ、「ソーシャルキャピタルで稼ぐ」という方法の検討の経緯(途中)について、お話ししたいと思います。

では最初に、あの世間を騒がせた、**老後2000万円問題**についてレビューしてみたいと思います。

事の始まりは、問題が発生した2019年より、さらに2年前にさかのぼります。2017年に、「[平成28年度版高齢社会白書](#)」の中で、将来の高齢者の平均的な老後資金需要が約**2000万円**であるという試算が示されました。これは、それまで老後資金の目安とされていた**1000万円**を大きく上まわっていたため、当時も大騒ぎになりました。

そして、この問題を本格的に爆発させたのが、2019年にリリースされた金融審議会 市場ワーキング・グループ報告書「[高齢社会における資産形成・管理](#)」の、この内容です。

老後の生活においては年金などの収入で
足らざる部分は、当然保有する金融資産から
取り崩していくこととなる。65歳時点に
おける金融資産の平均保有状況は、夫婦世帯、
単身男性、単身女性のそれぞれで、2,252万円、
1,552万円、1,506万円となっている。なお、
住宅ローン等の負債を抱えている者もあり、
そうした場合はネットの金融資産で見ることが
重要である。



(2)で述べた収入と支出の差である**不足額約5万円が毎月発生する場合**
には、20年で約1,300万円、30年で約2,000万円の取崩しが必要になる。

※赤線は筆者が追記

この記載には、2つほど、私を恐怖に陥れる記載がありました。

まず第1は、65歳時点における金融資産です。『みんな、こんなにお金貯めているの?』と驚きました。加えて、ここで記載されている「金融資産」というのが、一体何を差しているのか ― 貯金とか証券だけなのか、購入した不動産も入っているのか ― などの具体例が全く開示されておらず、さらに不安になりました。

第2に、この問題の起爆剤となった原因が、**不足額が5万円/月と仮定すれば、当然に、5万円 × 12カ月 × 30年 = 1800万円になる、という単純な四則計算の結果だった、ということです** ― つまり、私たちは、この小学生の計算ドリルの問題程度のことでおびえていた、ということです。

とはいえ、この5万円 × 12カ月 × 30年 = 1800万円 は、これはこれで怖い数値です。そもそも不足額は5万円で済むの? そして、私たちは長生きすればするほど、お金がなくなる恐怖におびえ続けなければならないの? ということです。

さらに、(後述しますが)麻生元財務大臣(以下、麻生さん)の、『若いうちから資産形成しておけ、ということだな』という発言は、私には『まあ、高齢者は手遅れ、ということだな』と聞こえました ― これも結構な恐怖でした。

『老後2000万円問題』の発生と経緯(1)

YouTubeの委員会映像を見て、江端がまとめたもの

用語	内容
2017年	厚生労働省の「平成28年度版高齢社会白書」の中で、将来の高齢者の平均的な老後資金需要が約2000万円であるという試算が示された
2019年 6月3日	金融庁のワーキング・グループ報告書「高齢社会における資産形成・管理(*)」がリリース
6月4日	麻生元財務大臣(以下、麻生さん)が、『若いうちから資産形成しておけ、ということだな』との(肯定的な)コメント
6月11日	麻生さんが、『政府のスタンスと異なるので、上記の報告書を受けとらない』との(否定的な)コメントを言い出した
6月14日	上記の麻生さんの発言についての委員会(質疑)が開催 麻生さんの主張: (1)政府は、これからも無職高齢者が生活していける年金を支払う (2)今回の報告書は、無職高齢者が5万円の貯蓄切り崩しをしているというデータが書かれているだけ (3)上記(1)(2)は別段矛盾しないが、政府スタンスとは異なるので、報告書を受けとらないことにした

政府(金融庁)が作った報告書を、政府(大臣)が受けとらない ——って、どういうこと？

で、この一連の事件において、弁明を続ける麻生さんのロジックはなかなか見事でした(研究員として、見習う点が、非常に多かったです)。さすがは、海千山千の政治家の本領発揮というところでしょうか。

まあ、その総括は後回しにし、その前に、根本元厚生労働大臣の記者会見の動画([参考](#))の私のまとめを記載します。

『老後2000万円問題』の発生と経緯(2)

国民の意識と政府の主張の違い

国民の認識	厚生労働省の主張
(A) 現在の年金では、毎月5万円足りなくなる	(1)無職の高齢者夫婦が(2)月平均5万円の貯蓄を(3)活用しているデータを示しただけ
(B) 生涯で2000万円足りなくなる	そんなことは、一言も言っていない
(C) なんで、(A)政府の方針と(B)政府の報告書の内容が違うの？	違ってない。ただ、国民に誤解を与えたかもしれないことについては「ごめんなさい」

(1)老後生活を守る年金は支払っている、が、(2)データでは平均5万円/月の取崩しがある

つまり、こういうことですね。

(Step 1) 政府は『無職の高齢者が生活していける年金は、これまで支払ってきたし、そしてこれからも支払い続ける予定だ』→(しかし)→

(Step 2) 平均5万円/月の取崩しがあるのはデータが示す事実ではある →(しかし)→

(Step 3) それをもってして、2000万円足りないということになるとは思っていない →(しかし)→

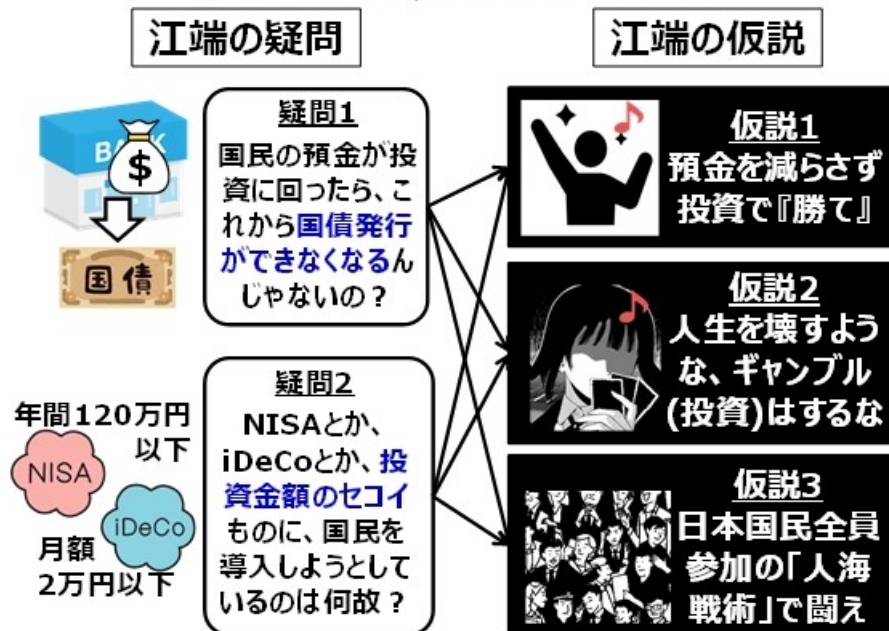
(Step 4) レポートが、そのように国民に誤解されるような記載になっていたことについては謝罪する

この件についての、私の所感を一言で言えば、全ての世代に対して忖度(そんたく)しなければならない、レポート作成担当の官僚たちの苦悩、です。

「平均5万円/月の取崩し」があるのは事実で、この記述は若者に対するお金への意識改革を促す起爆剤としての役割が期待されていたのだと思います。例えば、政府の提唱する「新しい資本主義」の中の、若者への投資の呼び掛けです。

(既出)国民に投資を呼びかけている理由

金融ト素人の江端の疑問と仮説



この仮説が正しければ筋の通った説明ができる

既出「[「令和版所得倍増計画」の正体 ～全国民参加の不労所得獲得戦略](#)」

「シニア」を安心させる記載が皆無

一方、このレポートには、年金受給のカウントダウンに入っている私のようなシニア向けの説明がない —— これが大きな問題でした。

つまり、若者のように老後まで残された時間がない人間を安心させるような説明、例えば、「あんたたちは、もう(投資戦略などには)間に合わないけど、それでも、あんたの老後は大丈夫なんだよ」という説明が、レポートの中に一言も記載されていなかったのです。

私はここに、金融庁のワーキング・グループのメンバーのジレンマを見て取りました。

うかつに「大丈夫」と言えば、若者が投資モチベーションを失うかもしれなません。だからといって、「不安」と言えば、私のようなリタイア準備軍、またはリタイア正規軍から、「政府は嘘をついていたのか!」とクレームの嵐がくるのは当然です —— で、まあ、実際にそうなったのです。

『老後2000万円問題』の発生と経緯(3)

色々な省庁や大臣(と国民)が巻き込まれた



麻生さんは、当初、このレポートの内容を絶賛……とまでは言わないまでも、「まあ、おおむね妥当」というコメントをしていましたが、後日、「政府としてはこのレポートを受け取らない」と言い出したので、私もすごく不安になったのを覚えています。

そももって、

2000万円! —— そんな金、わが家のどこにあるんだ? みんな「金がない」とか言いながら、私をダマしていたな! みんな、嘘つきだ!!

という、被害妄想に陥ったわけです(今も、陥っています)。

年金はショボくなくても、なくなりはいしない

いずれにしても、この「2000万円問題」が国民に与えたショックは相当なものでした。

正直、国民がどう考えようが構わないのですが、私の娘(長女)までも、日本の年金システムが破綻する、と思い込んでしまい、『国民年金保険料の支払いを止めようかと考えている』と言い出しました。

私は、長女に対して、「ロジカルに考えれば、日本の年金システムがなくなることは、ないと思うよ」と、以下の理由を掲げて説明しました。

年金破綻論に関する江端見解

(1)サービス(金額)はショボクなっていくと思う

(2)しかし『年金制度がなくなる』ことは『ない』と思う

江端が「そう」考える理由

#	理由	具体的なイメージ
1	年金制度が壊れる時には、日本国が壊れる時だから	■ 国家って、なかなか崩壊しない ■ そもそも「国家の崩壊」がイメージできない
2	年金制度を破綻させたら、どんな政権も成立しえないから	■ 65歳以上の票がゼロになったら、もうその国は、国家の体をなさない ■ 死に至るまでの福祉をサポートしていない国に、誰が居座る？
3	国際的信用を一気に失うから	■ 年間数百～数千の餓死者を出したら、G7から日本の追放は確定的。 ■ 国際通貨としての『円』も紙屑同然となる

最悪でも「餓死しない金額」は担保されるはず

第1に、『年金制度の廃止 = 日本国国家の崩壊』となるからです。もっとも、「国家の崩壊」とはどういうことかについて、実は誰もはっきりしたことを言っていないのですが、少なくとも、デフォルト(国債の債務不履行)は、国家の崩壊ではありません。

調べてみればすぐに分かりますが、デフォルトなんぞ、世界中で何度も起こっています(最近では、あの米国でさえも、デフォルトになりかけました)*。

『デフォルト』とは何か

日本の借金を、日本が払えなくなること

用語	一口説明	その他
日本国債とは	日本国が発行する『借用書』のこと	利子が付く、日本で超安全・超確実な投資の一つ
デフォルトとは	『借用書』に記載の返済が行えなくなること	(国内だけでなく、世界中に) 日本の面子丸潰れ→信用ガタ落ち →国内外のビジネス停止へ
デフォルトしたらどうなる？	「支払えなくなる」ので、「支払わない」だけ	普通は、自国の通貨の価値を下げて対応する(通貨切り下げ) 例:1\$ = 120円 → 1\$ = 1200円 になるくらい紙幣を刷りまくる →これで、「借金」は払える →ただ、円の価値が大暴落するので、返済されても大損となる

借金を踏み倒すだけで、
日本が地上から消滅する訳ではない

＊) 関連記事:「[定年を自覚したエンジニアがひねり出した“投資のHello Worldアプローチ”](#)」の「デフォルトって何?」

第2に、年金制度を破綻させたら、どんな政権も成立しえないからです。国会の目的は、一言で言えば「幸福な国民生活を実現するための法律の制定」であり、政府は、それを実行する主体です。「納税できなくなった国民はみんな死ねばいい」というような公約を掲げる政党は存在できませんし、仮に政府がそのような政策を実施すれば、暴動どころか革命が起こります。

第3に、そこまで過激ではないにしろ、「納税できなくなった国民を露骨にないがしろにする国家——日本」というイメージが確定すれば、その国家は、国際的な信用を失います。まず、国際通貨としての円は、紙くず同然になり、支払い能力を失った日本は、間違いなく国際的なサプライチェーンから排除されます。

年金制度の廃止によって、餓死する老人が路上に放置される国家——私は長女に、「そんな日本が、自分の人生に登場することがイメージできるか?」と、問いかけました。

もっとも、これから、年金サービス(金額)はショボくなっていくと思いますが、年金制度を廃止する国家を、私はイメージできません。

むしろ、年金の金額が生存を担保できないほど低くなって、国内での餓死者が出れば、政府は、自衛隊のイージス艦やF-15を売却してでも、その財源を確保するはずです。これは、国家の面子(メンツ)や体面の問題だからです。

というわけで、長女には、『国民年金保険料の支払いは続けておけ』とっておきました。

『もし、年金制度が崩壊して餓死するようなことになれば、その時は、この国(日本)と道連れに死ねるぞ。それは、それで悪くない玉碎、とは思わんか?』とっておきました——この理屈が、自分の子どもに語る内容としてふさわしいかどうかは、さておき。

定義がよく分からない「年金破綻」

私、今回のコラムの執筆に関して、年金システムの破綻について、いくつかの文献に目を通したのですが、正直に言って「良く分からん」でした。

年金破綻論に関する各種論説のレビュー

『年金破綻』の具体的なイメージが分からない

江端が調べた範囲

#	概要	アプトブット
1	「年金制度破綻」を定義している人がいない	「金額が少なくなる」「受給年齢が上がる」とは書いてあるが、それが『破綻』なのか?
2	「受給年齢」が上がるのは、戦後一貫して同じ	65歳なんて、今、普通に働ける(後述)
3	2040年ごろから、高齢者の数が激減していく事実が語られていない	悪化し続ける状態は、ある時点で(固定かされた悪化状態で)停止する

「年金制度破綻」を「正確」に「定義」してほしい

厳密に考えれば、「年金制度の破綻」とは、(1)納税者に対する国民年金保険料の納付の停止と、(2)年金受給資格を持つ国民に対する年金の支給の停止の両方が実施され、(3)永久に再稼働しない、の3つが成立しなければなりません。

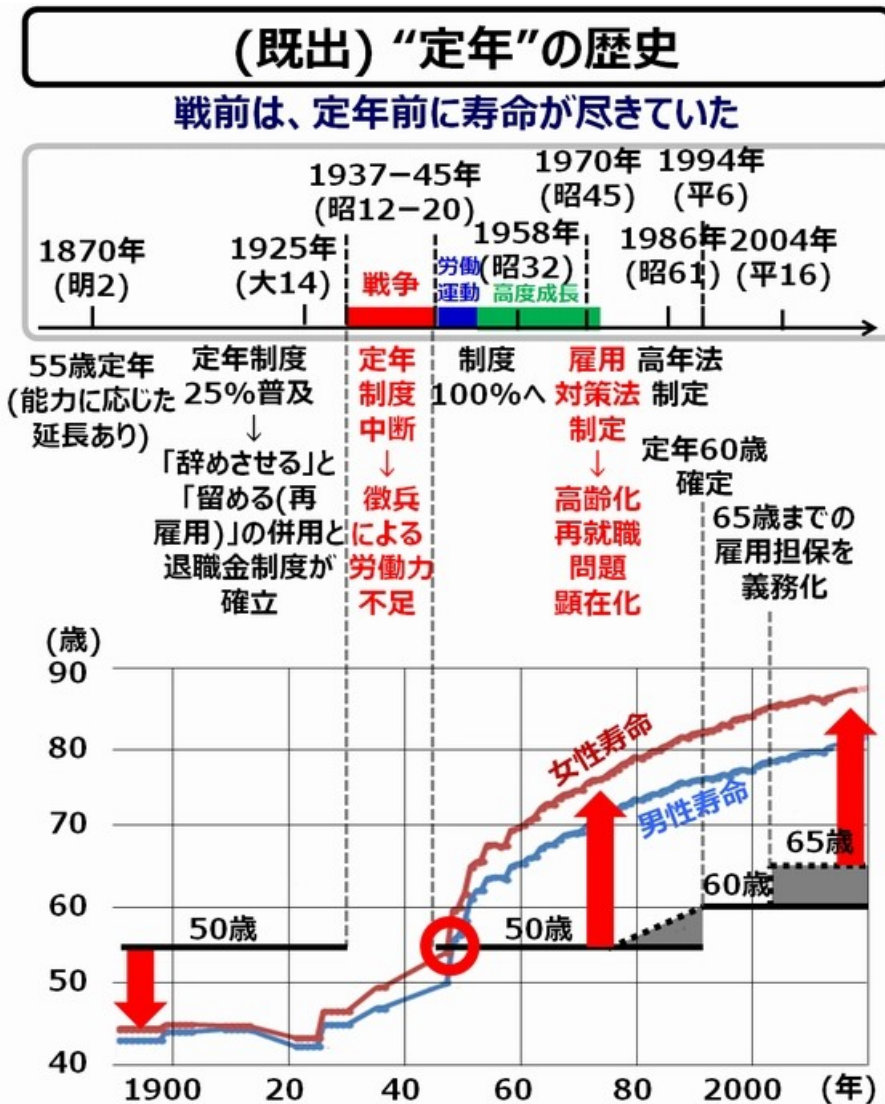
支払は停止するが、納付は続けろ——そんなむちゃな話が通るわけがありません。とすれば、「年金制度の破綻」とは、一体どういう状態を言うのか?

私は上記の説明において、「生存権を脅かされるまで、年金支給金額が下がった時」が、「年金制度の破綻」と決めつけて、話をしてきましたが、これは私のオリジナルの定義です。

政府は「年金制度の崩壊なんぞ、ありえない」と言い張っていますので、彼ら（政府）が、これ（年金制度の崩壊）を定義することはありません。アカデミズム（論文）や産業界の分野でも調べてみましたが、ドンピシャの文献を見つけられていません（ご存じの方は、私に教えてください）。

そこで、別のアプローチを考えてみました。「年金受給年齢が上がる」ことを持って、『破綻』と言い張るのか？です。

ところが、そもそも、年金制度では、これまでも年金受給年齢が上がり続けています。理由は簡単です。寿命が延び続けているからです。



「働いて稼げるなら、年金はいらんだろう」というのは、非常に分かりやすく、シンプルで、反論しにくい強力なフレーズです。もっとも、わが国には、定年制度という「高齢者を強制的に職場から退去」させる法律^{*)}がセットになっており、これが年金制度と補完の関係になってきました（関連記事：[「定年がうっすら見えてきたエンジニアが突き付けられた「お金がない」という現実」](#)）。

*) 高年齢者等の雇用の安定等に関する法律（昭和46年法律第68号）

まあ、この法律（定年制）は、雇う側にとっても雇われる側にとっても、都合のよいものでした。雇用者は『もっと働いてもらいたいんだけど、定年制度がね……』と言い訳でき、被雇用者は『私は、まだまだ働く能力があるが、法律が禁じているから』と言い訳できるという、まあ、いわば、職場における円満離婚離職のよりどころになってきたのです。

「健康な高齢者がブラブラしやがって」

現在、60歳が定年年齢ですが、現在、雇用者には65歳までの雇用義務が発生しています ―― ところが、今や、多くの65歳は、十分に働けるだけの健康と体力を保持しています。これは、今後の年金受給年齢を引き上げ続ける要因となっていくだろうと思います。

また、現在の深刻な労働者不足は、高齢者を働かせ続けるトレンドに向いていくと思います。少なくとも、私の属する技術の分野は、その傾向が顕著です。なぜか？ 現在社会を支えているシステムは、全部、私たちが作ってきましたが、システムそのものは、老化しないからです(リプレース需要はあるのですが)。

社会インフラ ―― 鉄道、電気、水、ガス、交通システムの基本的な機能は、驚くほど変わっていません。

これらの社会インフラのシステムリプレースに際して、「20年前と全く同じシステムを持ってこい」といわれることがあります。20年前の制御コンピュータや通信ケーブルなんぞ、地球上のどこにもありません。

新しいコンピュータにシステムをダウングレードするだけなら簡単だろう？ と考えた人は、はっきり言って素人です。CPUの制御命令の順番がほんの少し変化するだけで、挙動を替えるシステムなんぞ、世の中にはゴロゴロしています。この流れでいけば、「20年前と全く同じエンジニアを連れてこい」と言われるのは、ほぼ確実です。

ちょっと話がズレてきました。元に戻します。

「働いて稼げるなら、年金はいらんだろう」のロジックは、(1)健康で体力が維持されることに加えて、(2)シニアにまだやる気があって、(3)退職後の給与が退職直前と同程度の賃金や身分が保証される、という条件で成立するものです ―― で、これは、今後の社会において、簡単に、「差別」につながりそうです。

「いい若者が、昼間からブラブラしていやがって」の定番フレーズが、「健康で元気な高齢者が、昼間からブラブラしていやがって」と言われる時代になります。これから高齢者(老人)は、四六時中働かないと、世間様に顔向けできなくなる、という(嫌な)時代が到来すると思います。

しかし、高齢者のスキルと、会社のニーズがマッチする可能性は低いです。



関連記事: [「制御の世界の“黒船”、TwinCATでメイドを動かす」](#)

再掲:“定年”後の問題

みんな、自分の利益で精一杯



関係者全員が、炎上状態

以前、リカレント教育^{*})と呼ばれるものが流行っていましたが、最近は、「リスキリング」という言葉に取って代わり、使われています。

Re-Skilling(再技術取得)とは、技術革新やビジネスモデルの変化に対応するために、業務上で必要とされる新しい知識やスキルを学ぶことです。

*) 関連記事:「[リカレント教育【前編】三角関数不要論と個性の壊し方](#)」

リタイア後も働きたいと考えているシニアは、今の自分が持っている特技/技術をそのまま使って、ラクしてお金を稼ぎたいのです。別にシニアに限らず、リカレントであれリスキリングであれ、誰にとっても、新しいことを学ぶというのは、とても辛く大変なことだからです。

例えば、私の場合、プログラミングの技術があっても、自分の得意なコンピュータ言語ならすぐに始められると思いますが、別のコンピュータ言語を覚える必要が発生するのであれば—— たった、それだけのことで、着手するのに躊躇(ちゅうちょ)してしまいます。

ぶっちゃけて言えば、仕事の結果を出すのは当然としても、仕事のやり方にまで口を出されたら、3日も待たずに離職してしまう自信があります。

というわけで、リスキリングに失敗した私は、世間から「健康で元気な高齢者が、昼間からブラブラしていやがって」と言われるのが嫌で、『ひきこもり』になることでしょう。

もしかしたら、私のようなシニアが、連帯すべき相手は、ユース(若者)の世代なのかもしれません。『私の本当の実力を、世間が理解しない。だから私は悪くない、世間が悪い』と言い放ち、シニアとユースが傷を舐め合うコミュニティの成立です。



まあ、これは、最低のコミュニティーですが、それでも、完全に孤立化するよりは、幾分マシだと思いますが。

2000万円分の「ソーシャルキャピタル」を作ればいいのでは？

ここから後半になります。

前半で、私は、

2000万円 ―― そんな金、わが家のどこにあるんだ？ みんな「金がない」とか言いながら、私をダマしていたな！ みんな、嘘つきだ！！

と叫んでいましたが、どんなに泣こうが喚こうが、“ない”ものは“ない”のです。

で、最近、それならば、2000万円の代わりになるものはないか、と真面目に探し始めています。で、今、その候補の一つが、この連載で、何度かお話してきたネタの一つである、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）です。

ソーシャルキャピタルとは、社会学や経済学などの学問領域で用いられる概念です。これは、人々や集団が相互に信頼し合い、協力し合うために持つネットワークや社会的な結びつきの資源を指します。ぶっちゃけていえば、友人、交友関係、家族、学校、会社、町内会などは、このソーシャルキャピタルという価値の製造装置である、とする考え方です。

つまるところ、キャピタル（金）が作り出せないなら、上記の装置（？）を使い倒して、ソーシャルキャピタルなるものを製造して、2000万円に近づけばいいんじゃないの、という、身も蓋もないことを考え始めています。

まあ、ご存じの通り、私は、孤食、[読食](#)、[飲み会嫌い](#)の、[人間嫌い](#)の徹底した、「ぼっち主義者」ですので、この話（ソーシャルキャピタル）の話をしたら、家族全員から盛大にせせら笑われました。まあ、これまでの私の振る舞いを見ていれば、仕方がないことだとは思っていますが。

が、2000万円の不足分をソーシャルキャピタルが担保できるのであれば、その不足分のためだけに、「ぼっち至上主義者」の理念を捨てるのもやむなし、と考えています。

「陽キャ＝金持ち」が成立してしまうのか

でまあ、このソーシャルキャピタルの原書とも言われている、パットナム先生の「[孤独なボウリング](#)」を読んで、自分なりにまとめたのですが ―― かなり嫌な結論になってしまいました。

以下が、その読書メモです。

「孤独なボウリング」を読みながら書いたメモ

原書

SC: ソーシャルキャピタル

『哲学する民主主義』、『孤独なボウリング』、Putnam, R.D.(パットナム)

SCの定義

- (1) 調整された諸活動を活発にすることによって
- (2) 社会の効率性を改善できる、
- (3) 信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴

これは“SCによる効果”と読み直していいだろう

SCの3つの構成要件

SCが指し示しているのは
(1) 個人間のつながり、すなわち、社会的ネットワーク、およびそこから生じる、「互酬性」と「信頼」の「規範」である

個人が他人を助ければ、必ず相手もこれに応えてくれるという期待によって成立する相互作用

相手や対象に対し自分の期待した通りの結果が返ってくることを信じられること

「～である」と記述される事実ではなく、「～べきである」とされる命題ないしその体系

江端独自のSCの解釈

「助ければ、助けてくれる」が「発動すること」を、(「信じられる」では足りず)「信じるべき」——という社会的な価値(資産)

この図の最後のところに記載していますが、私なりのソーシャルキャピタルの資産的な価値とは、「誰かを助ければ、自分も助けてもらえる」が、何度も繰り返されて、実績として積み重なり、それが確信できるレベルにまで至った、ある社会(組織)における心理的状態」ということになります。

で、まあ、ここまではよかったのです。

問題は、そのようなソーシャルキャピタルを持っている人は、誰か？です。それを考え出したら、だんだん不快な気分になってきました。

ソーシャルキャピタルを持っているのは誰？

「SCを多く持っている人間」を「お金持ち」と書いてみる

友人が多い人は、お金持ち

多くのグループに属している人は、お金持ち

今の社会を信用できる人は、お金持ち



この理屈を推し進めると

(1)「友人を多く持っている＝現金を多く持っている」

(2)「町内会での活動の継続＝定期的な収入源」

ということになって、

『陽キャ＝お金持ち』が成立してしまう

もう、私の不快の原因は明らかですね。性格が明るく、人づきあいが得意で活発な人、つまり「陽キャ」は、「陽キャ」であるだけで、お金持ちである、という理屈が成立してしまう、ということです。

もちろん、「陽キャ」になるように、自分の性格を改造することもできるでしょうが、私の場合、その改造コストが大きすぎて、ソーシャルキャピタルから得られる利益には、全く及ばないと思います。

そういえば、ウェルビーイングを調べていた時にも、似たような話があった気がします。以下に、その概要を記載しますが、これも結構「不愉快」です。

主観的幸福に関する興味深い研究結果

主観的幸福=SWB: Subjective Well Being

#		江端の超要約
1	感情的SWBと認知的SWBはともに安定的であり、おそらく遺伝的な影響を受けている	生まれつきの性格で、幸福が決まる
2	目標達成度、生活環境が良い、収入が高いほどSWBが高い	目的意識、生活水準、収入で、幸福が決まる
3	SWBは時間の経過とともに所得の増加に比例して増加するわけではない	収入と幸福は正比例しない
4	SWBは通常、年齢とU字型の関係をもち、40歳前後で最も低く、その後徐々に増加する	40歳は、不幸せのどん底
5	結婚はSWBを増加させるが、離婚や配偶者の死はSWBを減少させる傾向がある	結婚は幸せで、離婚や死別は不幸せ
6	失業は、特に社会的支援が少ない場合、SWBを低下させることが示されている	社会がちゃんとしていれば、「失業=不幸」とはならない
7	ある研究では、女性は男性よりもSWBが高く、ある研究では差がなく、さらにある研究では、性差はライフパターンによって異なるといっている	女性は男性より幸せ

採択論文から引用した、信用できる内容

生まれつきの性格、生活水準、結婚、性別 ―― これらは、私たちがコントロールできないものや、私たちの努力だけでは、どうしようもないものがあります。そして、ウェルビーイングとソーシャルキャピタルは、密接な関係があります(今回、その説明は割愛します)。

つまるところ、ウェルビーイングとソーシャルキャピタルは、運の要素が大きい、ということです ―― これを今風に言うのであれば「性格ガチャ」「環境ガチャ」「性別ガチャ」とでも言うのでしょうか。

ここで、再度、ソーシャルキャピタルとは何か、について考えてみました。これを単体で再検討しても、よく分からないと思いますので、普通のキャピタル(資本)とされているものと比較してみました。

	キャピタル (資本)	ソーシャルキャピタル (社会関係資本)
定義	お金の中で、特に、企業が事業を開始、成長、拡大するための 資金や資源 で、ビジネスの成長や運営に関連するもの	人々の 社会的なつながりや相互作用、信頼関係 などを指し、社会的な成功や協力に関連するもの
把握方法	(1)「蓄積量」という概念で把握する: → キャピタル/ソーシャルキャピタルの蓄積量は、開発(熟成)時期と関連する → 開発時期が古いほど蓄積量が多い (2)「地域」によって差異が発生する: → 家庭や学校、近隣地域で、キャピタル/ソーシャルキャピタルの発生量が異なる (3)「文化」「制度」「習慣」によって差異が発生する: → 制度や文化に基づく経済力や、コミュニケーションの質や量で異なる (Murayama et al., 2012; Putnam, 2000)	
留意事項	キャピタル/ソーシャルキャピタルはコミュニティの性質の“1つ”であって、“全て”ではない (Kawachi, Takao, & Subramanian, 2013; Putnam, 2000)	

ここで重要な点は、キャピタルもソーシャルキャピタルも、自分の周りの環境であるということです。もちろん、環境は自分で変化させることができることもあります。しかし、基本的に自分の周りの環境を決定するのは、**自分の力だけではどうしようもできない**、歴史的な経緯や、地域特性、文化、制度、習慣などというものだったりします。

今の私には、キャピタルもソーシャルキャピタルも、ほとんど同じに見えます。ですので、**2000万円の問題を、ソーシャルキャピタルで引っくり返すのは**、(特に私の場合には)ちょっと無謀のように思えてきました。

ただ、私、この**2000万円問題をソーシャルキャピタルで引っくり返す一つの方法論** — ただし、私だけにしか使えない方法ですが — を案出しています。次回、このアイデアについてお話をさせて頂ければと考えております。

ソーシャルキャピタルとは「水物」である

それでは、今回のコラムの内容をまとめてみたいと思います。

【1】今回は、あの世間を騒がせた、老後2000万円問題についてレビューを試みました。

【2】問題の発生源となったレポート(金融庁の報告書「高齢社会における資産形成・管理」)に記載されていたデータで「退職した夫婦が毎月5万円の貯金の取崩しを行っている」という記載に、それを単純に30年間続けると**1800万円**になる、という記載が加わっていたことが、事件の発端となりました。

【3】最初に、このレポートについて当時の財務大臣が**肯定的なコメント**を出したことで、世間は『2000万円の貯蓄がないと、老後が危うい』と解釈して騒ぎになり、さらに、大臣が『このレポートは政府の方針と異なるから受理しない』という**否定的な発言**を行ったことで、さらに、事件が混迷して騒ぎは大きくなりました。

【4】このレポートについて、私は、「このレポートに**政治的なバイアスがあるのは明確である**」と断じた上で、年金制度崩壊についての**独自の否定論**を展開しました。『年金制度崩壊は国家の崩壊と同義であるので、それを回避するためであるなら、政府はいなかる手段も取らざるを得ないだろう』という私の見解を示しました。

【5】老後2000万円問題を別のアプローチで解決する方法として、人々や集団が相互に信頼し合い、協力し合うために持

つネットワークや社会的な結び付きである「ソーシャルキャピタル」によるアプローチを検討してみました。

【6】しかし、ソーシャルキャピタルも、一般に使われているキャピタルと同様、本人の努力や才能以外の事項で構成される資本であることが分かってきて、このアプローチがどうやら、うまく働きそうにない、という悲観的な結果を導出しました

以上です。

□

今月、とある国際学会に出席して発表と聴講をしてきました。特にソーシャルキャピタルに関するものについては全部出席して、発表者にかなり執拗に質問してきました。

もちろん、本シリーズのコラムのネタを拾うという、邪な思惑もあってのことですが。

その発表の一つに、高齢者に対する、自動車の購買意欲に関するソーシャルキャピタルに関する研究の発表があったのですが、そこで、75歳の高齢者の購買の動機となる理由に『人生最後の買い物』というフレーズが出きました。

そこで、私は、以下のような質問を発表者に投げかけました。

江端：「その『人生最後の買い物』というのは、購買者の発言ですか？」

発表者：「そうです」

江端：「その人は、”75歳が本当に自動車を購入するラストチャンス”と思っているのでしょうか？」

発表者：「はい？」

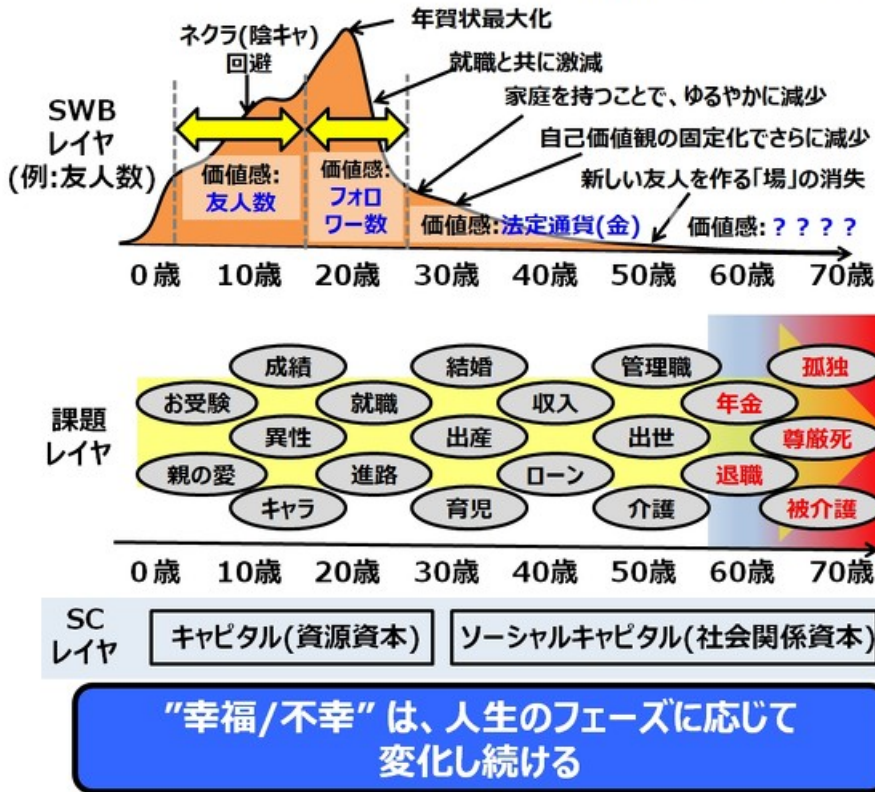
江端：「今や、75歳では”死ねない”時代に突入しています。もしかしたら、あと25年間生かされ続けるかもしれないのです。購買者には、そのような、100年を”強制的に生かされ続けるかもしれない”という自覚、また他者からのリスクの提示はあったでしょうか？」

発表者：「……なかった、と思います」

ソーシャルキャピタルというのは変動的です。時代に対して変動であることは言うまでもありませんが、人生においても、変動し続けるものです。以下の図は、江端の友人数の変化を主観的ウェルビーイング(SWB)の観点から見たものです。

江端のSCとSWBのサンプル

SC:ソーシャルキャピタル SWB:主観的ウェルビーイング



しかし、私にとっては、友人数以外の項目でのSWBがあり、友人数をもってして、江端が、年齢を重ねるごとに不幸になっている、とは言えない訳です。――が、

それでも友人数というのは、ソーシャルキャピタルの総量を算出する重要な要素なのです、不愉快なことに。

「知的シニアワーカー」を目指せ

後輩:「今回のコラムで、ようやく『老後2000万円問題』について、概要を理解できました。ありがとうございました」

江端:「レポートの出所や、省庁や大臣の関連をトレース(追跡)するのが大変だったけど、大きくは間違っていないと思う」

後輩:「しかし、この問題、ポジティブに考えれば『月に5万円の収入を確保できれば、なんとかなる』とも言える訳ですよ」

江端:「まあ、体が元気で健康であるうちは、あまり心配しなくてもいいのだろうけど、それが、いつまで続くか、まるっきり分からないから『高齢者』なんだよなあ」

後輩:「最近、スーパーマーケットで働いている高齢者のニュースとか見るんですけど、なんか、よく見てみると、なんか、普通の若いアルバイトとは異なる雰囲気を感じる事があって……」

江端:「あ、それ分かる。この人、明らかに、大きな会社の社長や重役クラスの人だったに違いない、と感じさせるようなオーラが見えるのよね。しゃべり方とか物腰とか」

後輩:「なんというか、動き方を見ても、非常に合理的に動いていて――野菜の運搬や配列にすらムダがない――働き方に、ある種の“インテリジェンス”を感じるんですよ」

江端:「あ、それ分かる。多分、そのような人たちは、“5万円の収入”が目的ではなく、“適度な運動による健康管理と、社会との没コミュニケーションの回避”を目的とした、有意義なリタイア後のライフを作っているのだと思う」

後輩:「憧れますねえ、そういう老後」

江端:「まったくだ。私も、“効率的な商品の配列”とか、“余裕のあるクレーマ接客”とかができる、『知的シニアワーカー』を目指したいものだ」

□

後輩:「後半の、ソーシャルキャピタルの話も、非常に興味深かったです。実は私、最近町内会会長になったのだけど、“正”会長をやらされるようになってからは『ソーシャルキャピタル、爆上がり』ですよ」

江端:「ほう。それはどういう感じで？」

後輩:「町内会の“副”会長をやっていた時には全く感じなかったのですが、“会長”になった時から、いきなり地域やらPTAやらの案件が、矢のように飛び込んでくるようになって、あれよあれよと言う間に、地域ネットワークの人間関係の渦の中、といった感じです」

江端:「それは、人間関係が”メタル”から”光ファイバ”に交換されるような感じ？」

後輩:「というか、知らない人間が、自分の中のメモリに勝手にインストールされていく感じ、ですかね」

江端:「”ソーシャルキャピタルの自動構築”？」

後輩:「それ以上かなあ。町内の人々が、私ごときに、丁寧にあいさつをしてきて、敬意を示されるのは、もちろん悪い気分ではありませんし、さまざまな組織の人たちと会話ができるのも、それはそれで良いことですが、なんかゲームで『チート*』をしているような『後ろめたさ』があります」

*）チート:いかさま、ごまかし、詐欺、不正行為

江端:「せっかく獲得したソーシャルキャピタルなのだから、それは大切に維持しつづければ良いと思う」

後輩:「江端さん。そういう、“自動構築されるソーシャルキャピタル”は、負の要素も山ほど含んでいるんですよ。ソーシャルキャピタルの中には、『もう、どうしようもない人間』というものも入り込んでくるわけで、こいつらは、明らかに、“負の資本”ですよ」

江端:「なるほど、ソーシャルキャピタルは、その種類を取捨選択できないのか。それは厄介だな」

後輩:「で、そういう、『もう、どうしようもない人間』の中には、『オレは、オレは』というやつがいるんですよ。とても簡単なことを、わざわざ難しくして、それをこなせる自分はエライ、と人に思われたい阿呆がいて——これが、もう本当にうっとうしい」

江端:「まあ、私たちエンジニアは、問題を最小コスト&最短時間で解決するアプローチを、徹底的に教育されているからなあ。そういう不合理に対応するのはつらいよね——まあ、私の場合、それが理由で、町内会とは、すっかり切れちゃったのだけど」

後輩:「とはいえ、ソーシャルキャピタルは、安全保障とも言えますので、こういう阿呆の“負の資本”の存在を考慮しても、全体としては、プラスと言えるかもしれません」

江端:「確かに、自宅で倒れていても、誰かに助けてもらえる可能性は、格段に高くなるしなあ」

後輩:「そういうことを、冗談ではなく、真面目に話さなければならない年齢になりましたねえ……お互いに」

江端:「今の話を聞いていると、ソーシャルキャピタルの恩恵を得るためには、“副”会長では足りず、“正”会長にならないといけない、と聞こえた。つまり、ソーシャルキャピタルにおいてすら、『資本の集中*』が発生している、ということだよな」

*）簡単に言うと、「お金持ちは、よりお金持ちになりやすい」ということ

後輩:「そうですね。一部の限られた人間のみが、キャピタル(資本)や、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)の恩恵を得

られる ―― というのは事実かもしれません」

江端:「私は、『老後2000万円問題を、ソーシャルキャピタルで逆転する』よりも、『スーパーマーケットの裏方で、上手に野菜の運搬をさばく老後』の方がいい―― うん、私は、『目指せ、知的シニアワーカー』で行くことにする」



Profile

江端智一(えばた ともいち)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[こぼれネット](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

Copyright © ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

